



翻訳

ヴォルフガング・ドレックセル著「エルンスト・トレルチのバイエルン領邦教会に対する関係」（トレルチ研究1に所収）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 晃兆 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00007843">https://doi.org/10.24729/00007843</a>

翻訳 ヴォルフガング・ドレックセル著「エルンスト・トレルチの  
バイエルン領邦教会に対する関係」(トレルチ研究1に所収)

高野 晃 兆\*

Übersetzung von Wolfgang Drechsel' „Die Beziehungen Ernst Troeltschs zur  
bayerischen Landeskirche“ (in: Troeltsch-Studien 1)

Teruyoshi TAKANO\*

エルンスト・トレルチのバイエルン領邦教会に対する関係は、その端初においては、終始ことごとくのバイエルンの神学生の領邦教会に対する関係と一致する。彼は勉学をプロテスタントの領邦立大学エアランゲンで始めている。その後はじめてバイエルン以外の大学で勉学を継続し、そして1888年バイエルン領邦教会の牧師採用試験〔第一次神学試験〕のために他の43名の受験生と一緒にアンスバッハに現れた。

試験開始として8月27日が定められた。試験委員会は、それが通例であったのであるが、バイエルンの牧師と教会〔会議〕役人により構成された。アンスバッハの聖職身分の宗教局評定官 Konsistorialrat ルッツとブルガーが指導権を持った<sup>1)</sup>。彼らと並んで世俗の身分の宗教局評定官フォン・リーデルスクローンと試験委員会の非常勤委員で年長のエアランゲン出身の神学得業士ゾンマー、ヴィンズバッハ出身の教区監督で、教会顧問のシュリーア並びにパイロイト出身のギムナジウム教授ネーゲルスバッハが影響力を持っていた<sup>2)</sup>。

受験生は14人、16人、14人の三つのグループに分割された。この三つのグループは異った時期に試験された。その際トレルチには第2の時期(9月2日日曜日から9月8日土曜日まで)が割り当てられた。

具体的には試験の週は指示された経過をとった。日曜日に試験委員会の前での面接の後、月曜日から水曜日まで毎日、2題抜き打ちの作文を書かねばならなかった。2題のうち《少くとも諸テーマの半分はラテン語で作成され》なければならなかった<sup>3)</sup>。その際次のテーマが提出された。教義学——現存の教会の多様性に対してキリスト教会の統一性と公教会化(vgl. FC X)。教義史——中世のスコラ哲学。旧約聖書学——イザヤ書6, 1-10

の釈義。倫理学——良心。新約聖書学——Joh. 18, 28-38の釈義。教会史——教会史的な連関のなかでの西洋と東洋の教会の違い。

木曜日には実践的な試験が行なわれた。まず最初にアンスバッハのグムベルトゥス教会における、試験の前すでに書面で提示された説教のテーマから選んでのテスト講演。その際トレルチはGal. 6, 14-16について説教しなければならなかった。そして引き続いて《そのために呼び集められた子供たち》<sup>4)</sup>の前での短い教理問答。そのテーマ(教理問答の三つの主要部分)が受験者に試験が始るに際してまず(9月2日)ギムナジウムの教授ネーゲルスバッハによって伝えられた。そしてこのテーマを彼らの試験期間中に練り上げなければならなかった。

金曜日から日曜日まで口頭試問が行なわれた。受験生に対する尋問は次のテーマ圏に関係していた。教義学——恩寵の媒介について(de mediis gratiae)。教義史——最初の2世紀間の説教の動き。信条学——信仰告白に基づく司祭と説教者。旧約聖書学——1 Sam. 12, 1-16。倫理学——道徳的なものの概念。新約聖書——1 Kor. 2, 1-16/3, 1-7。教会法——歴史的発展のなかでの教会制度。教会史——カール大王と教会。

口頭試問が終わって後、受験生に成績が通知された。成績は7段階(最優秀から優、良を経て、不適格まで)<sup>5)</sup>にわかれているが、エルンスト・トレルチはII+(=11% ; ほぼ最優秀)をとった。彼はこれでもって試験に合格した。それ故この時から聖職候補生に採用された<sup>6)</sup>。同時にこの成績はこの年の最優秀のものであった。

このことはトレルチにとっては直接次のような結果となった。多数の説教職候補生は牧師採用試験(第一次神学試験)の後ただちに教会の補助勤務に動員されたが、バイエルン領邦教会は、《プロテスタントの司牧者の教育をできるかぎり促進し、そして特に倦むことなき熱心さ、徹底的な研究と模範的な態度によって傑出する神学

1992年4月10日受理

\*一般教養科(Department of Liberal Arts)

者に相応の勇気づけを与えるために》<sup>7)</sup>、1833年以来ミュンヘンに説教者ゼミナールを設立した。そこ——自由に選択できる施設——に《毎年採用試験のあと採用者のうち最もよくできた者のなかから8人が選抜》された。そして《そこで未来の職業のために、特に説教部門ですぐれた仕事をするために、2年間特別に教育された》<sup>8)</sup>。

このエリートゼミナールに居たことは、バイエルンの聖職者の中である意味を持っていた<sup>9)</sup>。殊に普通は毎年3人(5人まで)の〔説教職〕候補生しかプロテスタントの説教者ゼミナールに召集されなかったから。このことは1876年以来(教区での〔説教職〕候補生の使用を必要としたために、当時〔説教職〕候補生の不足する状態のなかで定められた)教会法的にも表現された<sup>10)</sup>。

トレルチは、そのすぐれた成績の故に試験委員会によっても問い合わせられて、彼が選ばれる場合には、直ちにミュンヘンの説教者ゼミナールにはいる気持があることを告げた。

それ故にトレルチの名前が説教者ゼミナールの9人の候補生の推薦名簿にのる。この推薦名簿をアンスバッハの宗教局が1888年9月17日にミュンヘンの王室の上級宗教局に提出した。そして1888年9月21日の上級宗教局の決定——それは《定められた年数の満了の前に多数のゼミナールの〔説教職〕候補生を教会活動に使用するという避けられない需要》のために〔上級生が教会活動にかりだされるので〕、今回は〔3人ではなく〕5人の〔説教職候補生を考えていた——によってトレルチはミュンヘンの説教者ゼミナールへ召集された。

この試験でのすばらしい成績の第2番目の直接の成果はビヤロウスキー財団からの旅行の奨学金の配分であった。1870年1月10日に設立されたこの財団はエアランゲン出身のヴィルヘルム・イムマヌエル・フォン・ビヤロウスキー教区監督<sup>11)</sup>に帰される。そしてその内容は120 fl〔Florin〕(それは約205マルクの価値がある)の神学的旅行奨学金が《聖職採用試験〔第一次神学試験〕に最も良い成績で合格したバイエルンの、ルター派の説教職候補生》<sup>12)</sup>に与えられるということであった。彼が問題の旅行を直ちに行うか或いは牧師任用試験〔第二次神学試験〕を終えた後にするかはそのつどの候補生にまかされていたので<sup>13)</sup>、トレルチはこの旅行をあとの時点で行うとはっきりと言った<sup>14)</sup>。1893年8月6日にはじめて彼はこの可能性を見つけ、そして《改革教会の研究のために》ドイツ語圏のスイスへ出かけた<sup>15)</sup>。

同じく選抜された仲間ユリウス・クノエル、エルンスト・ラウエバッハ、アンドレアス・シュヴィンデル、ゴットフリート・ザイラー<sup>16)</sup>と一緒に彼は1888年10月1日ミュンヘンの教区監督フィケンジャー<sup>17)</sup>のところへ面接

のために現れた。そしてこの面接の席上、各人は本来の職務と説教と授業に及ぶ活動範囲を一般に指示されたのち、各人は握手と同意とサインをしながら次のような義務を負うた：《私に課せられた或いは私によってひきうけられた説教、授業或いはそれがどのような種類のものであれ、その他の私に所属する職務においてわれわれの福音的・ルター派教会の信仰告白書において証言されているように聖書の教えを守り、知識に関して聖書からそれず、いわんや聖書に矛盾せず、私の教会の信仰告白に一致しないところの不確かなそして疑わしい教えによって刺激を与えないように私は約束する。その際私は書物の真理の認識においてそして私の教会の信仰告白において私をますます深く基礎づけ、そのことを通じて完全な信仰の確信に達するために何事をもおろそかにしない、つまり私は言葉と行為でもって、私の研究と品行において熱心に完全な信仰の確信を求めることを私にはっきりと署名をもって義務づける。》<sup>18)</sup>

以上でもってミュンヘンのプロテスタントの説教職ゼミナールとその教区の枠内での就職は定められた。

説教者ゼミナールにおいては〔説教職〕候補生のその後の神学に関する並びに牧師となるための教育が行なわれた<sup>19)</sup>。ゼミナールは通例上級宗教局評定官によって運営された。上級宗教局評定官は同時にミュンヘン教区の監督職を務めていた<sup>20)</sup>。1888年にこの教区にあったのは上級宗教局評定官ブーフルッカーであった<sup>21)</sup>。彼は、1885年にこの職を引きうける前は、説教者ゼミナールでの彼の先輩上級宗教局評定官ボイムラー<sup>22)</sup>の下にあり、すでにミュンヘンの教区監督であった。ブーフルッカーは彼の下におかれている人たちの間で終始人気のある人であったように思われる。そして《ホフマンの神学を教会に奉仕する手頃な硬貨に鑄造し直した実践の人》<sup>23)</sup>として描かれている。

トレルチと一緒にいたのはゼミナールではトレルチの同期生だけであった。というのは本来だったら2年目の過程を修めなければならない1887年の入学生は3名から成りたっていたが、そのうちの1人フィリップ・バッハマンは1年目の過程を終えたのち、エアランゲンの受験指導の家庭教師の職につくために休暇を与えられていた。2人目のマックス・フォン・アムモンは病気のために説教者ゼミナールに参加できなかった。ただヘルマン・ケーベル<sup>24)</sup>だけがしばらくの間滞在していたが、1889年2月28日にミュンヘンでの移動説教者としてゼミナールハウスをあとにした。

説教者ゼミナールの空間性はこの時代最高の教会当局と一つの屋根の下に居た。最高の教会当局が1886年にエリーゼン通り2番に引越し、そこでは下の2つの階だけ

を必要としたので、シュバンターラー通りにあるこれまで賃借されていたゼミナールの〔説教職〕候補生の居室は手離され、そしてこの《ささやかな建物》へ移された。この建物は《落ちつかない装置のなかのオアシスのよう》であった。<sup>25)</sup>ここ、3階の屋根裏にゼミナール生と寮母ヴァルトマンが生活した。彼女は以前ハルレス家に雇われていた。そして今やゼミナール生にとって共通の出合いの統合点となった。<sup>26)</sup>

この非常に簡単にかつ質素に備えつけられた家での生活をペダル付きのリードオルガンを備えつけることによって豊かにするという1888年12月5日の5人のゼミナール生の申し出は王室上級宗教局評定官によって経済的理由から拒否された。<sup>27)</sup>

ゼミナールハウスそのもののなかではゼミナール生は部屋代は無料であったが、しかしその他のこと〔食事など〕は自分たちで費用を出さなければならなかった。そのために毎年846マルクの生活費が支払われた。<sup>28)</sup>なるほど1837年のゼミナール生に対する訓令においては定められているように、<sup>29)</sup>部屋代或いは家政婦代はさしひかれなかったが、毎月自由になる70マルクは《ミュンヘンの暮らし向きにとっては質素なものであった》<sup>30)</sup>

その事から生ずる検約の努力を物語っているのが、1889年8月22日の上級宗教局への《臨時的補償をめぐっての》ゼミナール生からのトレルチによって書かれた申し出である。ゼミナール生は前年度学生ケーベルレの脱会の後に生じ、そして彼らによって引きうけられた教会の奉仕の代償にこの申し出を願い出た。即ち彼らは臨時的報償として60マルクずつを得たのである。<sup>31)</sup>朝の礼拝の補助と授業の功績によってゼミナール生にとってとぼしい財政をいくらかでも改善することが可能となった。<sup>32)</sup>

説教者ゼミナールとミュンヘンの教区の枠のなかでの本来の教会的な生活の始まりを意味するのは恐らく聖職按手式である。これはゼミナール滞在の最初の3ヶ月以内に行なわれた。それは説教者ゼミナールの〔説教職〕候補生を教区或いはディアスポラに完全に配置する必要性から生じたように思われる。(しかしこれは)一般的なバイエルンの聖職按手式の秩序に対して例外的な規則をひきおこしたように思われる、つまり一般的なバイエルンの聖職按手式の秩序は更に後の聖職按手式——牧師任用試験の後になってようやく行われる——に重きがある。<sup>33)</sup>1837年のゼミナール生に対する指令は説教者ゼミナール2年目の聖職按手式の受容について語っているが、<sup>34)</sup>トレルチの時代には〔説教職〕候補生が、補助聖職者としてミュンヘンの市の聖職者の職場で手伝うことができるために、<sup>35)</sup>できるかぎりはやく聖職按手式を施されたというのが、すでに《バイエルンの風習》となってい

た。

かくて〔説教職〕候補生たちは1888年12月2日に説教者ゼミナールの責任者である上級宗教局評定官ブーフッカーとミュンヘンの牧師ケルバーとカール<sup>36)</sup>によって聖マタイ教会において一緒に聖職按手式を施された。

トレルチのために出された聖職按手証には、1841年の聖職按手式の形式に従って、<sup>37)</sup>次のように書かれている：《1888年11月24日の王室上級宗教局の許可に従って、われわれはハウンスシュテテン出身の〔説教職〕候補者エルンスト・トレルチに彼によってなされた誓い、つまりキリストの教会の召使として聖なる福音の啓示された教えを福音主義的ルター派教会の信仰告白に従って、ひたすら説教しそして神聖なる sacrament を制定された通りに管理するという誓いに基づいて、祈りと手を頭にて、教会の聖職按手を授け、彼を福音主義的ルター派教会に仕える聖職身分に聖別した……祝福の言葉：もし私が人間の舌と天使の舌をもって語っても、愛がこもっていなければ、私は音を出す金属或いは鳴りひびく鈴にすぎないであろう。ところでいつまでも存続するのは信仰と希望と愛、この三つである。愛がそれらのうちで最大のものである。1. Kor.13,1.13-1. Kor. 4,2. Apoc 2, 10:人は家の管理者に、彼らが忠実であること以外のことを求めてはならない。死ぬまで忠実であれ。そうすれば、命の冠を与えよう。》

このことでもってエルンスト・トレルチに聖職の名譽が生涯にわたって授けられた。

聖職按手式は更にその後の伝記的な副作用をもった。つまりそれは軍隊において以後将校となる可能性の終結であった。何となれば聖職身分は根本的に武器をとる義務から解放された——聖職按手された神学の候補生は《按手式の4週間以内に軍隊から解放されたことを証明しなければならなかった》<sup>38)</sup>ように——ので、このことはトレルチの状況にもあてはまった。つまり彼は彼の軍務(1883-1884)をその予備役将校の資格と共に棄て、そして即座に将校候補者リストからの削除を申し入れなければならなかった。<sup>39)</sup>

さらに存続する軍事的義務は今後は武器なき奉仕にのみ限られた。1889年8月1日～18日の第1軍団の野戦病院の演習へのトレルチの参加がそのことを証明している。この参加のために彼はフィケンシャー監督によって説教者ゼミナールでの勤務が免除された。

彼の聖職按手式は彼が補助聖職者としてミュンヘンの教区で活動することができるという直接的な結果を持ったが、補助聖職者としての職を遂行する前に、1837年のゼミナール生に対する指示に従って、まず最初に直接ゼミナールに関係した活動があった。この活動はもちろん

トレルチの時代にはすでに強く縮小されていた。ゼミナールの原初的な意図は更に学問的に修業することに重点を置いていたが、《非常に移り変わる時代状況の結果、学問的修業ははじめにいくらか高くとらえられていた要求に従ってはもはや維持されえなくなり、教区とディアスポラでの教会奉仕にゼミナールの候補生の全時間を要求する実践的活動の背後へ次第にいよいよ後退せざるを得なかった》<sup>40)</sup>かくて究極的に80年代の特別なゼミナール活動として次のものが残った：1. ゼミナールの説教並びに批判、2. 所謂アカデミックな時間、3. 教理問答。

ところでゼミナールの説教は聖マルコ教会において火曜日ごとにひとりひとりの候補生によって交代に行われ、ひき続いて上級宗教局評定官ブーフッカーと他のゼミナール生——彼らにとってはゼミナールの礼拝への出席も義務であった——によって批判され、また批評された<sup>41)</sup>。それ故個々のゼミナール生にとってはほぼ5～6週ごとのゼミナール説教の順番が覚悟されなければならないであろう。ゼミナールに関係した活動についての上級宗教局評定官ブーフッカーの記録簿は教会暦年88/89に対するゼミナール礼拝の52の説教のリストを示している。それぞれの候補生には凡そ8～10回のゼミナール説教がまわって来たであろうと推測される<sup>42)</sup>。

トレルチにとってはこの時期の説教こそ信仰問題のたて方との強烈な個人的な対決へのきっかけを与えたということを示しているのがゼミナールの終りに W. プセットへあてた彼の手紙である：《それにもかかわらず私にとっては〔この年〕〔 〕は原著による）主たる課題は私が信じそして信仰を堅固なものにするものとして学んだことを説教しかつ教え、今度は再び私が説教しかつ教えたことを本当に信ずるという内的格闘であった。理解することは信ずることよりも限りなくはるかに容易であり、生命や本質を真に聖霊で満すことよりも限りなくはるかに容易である。聖霊の弁証のために悟性はいつも働いて来たのであった》<sup>43)</sup>。

説教と並んでこの時期に多分木曜日に行なわれた《アカデミックな時間》が存在した。それは本来志向された学問性の残部であった。その内容は一般に、教父、宗教改革者の読み物もしくは説教と司牧のための書物の断片に還元される。説教者ゼミナール88/89年度に対しては次のテーマが書き留められる。つまりフライダングの《謙虚》という書物の読書、そして《ルターの大教理問答がよく調べられ、時々論ぜられた》<sup>44)</sup>この時間はほとんど人気がなかった。1891年説教者ゼミナールに在籍したカーゼルマンは《学校》、《学校のような方法》、《たいくつ》という言葉をつかって報告している。《豊かな、カラフルな華やかな生活はここでは近づくすべ

知らない。》<sup>45)</sup>

その関心がまさしく学問的神学的研究にむけられていたトレルチのようなゼミナール生の場合に、この時間が学問性に関する彼らの要求を正当に評価していないという事実は、十分に学問に関わりたいという欲求をそれだけ一層強く刺激するまでには至らなかったとしても、少なからざる落胆をひきおこしたであろう。

第三のゼミナール活動、即ち教理問答注解と教理問答の実践練習は一部はゼミナールハウスの外で、つまりミュンヘンの奉仕女の施設の家事管理見習生のところで行なわれた。その際この年には聖書の使徒行伝2, 38とヨハネ6, 68-69がことごとくのゼミナール生によって取扱われ、そして教理問答として実践された<sup>46)</sup>。

ゼミナールと教区間のゼミナール側の義務の境界領域をポイムラーは1884年のゼミナールの50周年記念等のための講演でのべている：《その後の学問的な研究——これは実践的な〔職業〕訓練と必ずしも結びつかないかぎり——に対して冬学期の間教区監督ブーフッカーによって導入された説教者会議は、つまりゼミナール生は何に参加しなければならないか、そして何のためにゼミナール生は毎年学問的な研究をし、そして会議——これには詳細なディスカッションが続く——で発表しなければならないか、を取り上げた説教者会議は候補生に本当に実りある刺激を与えた》<sup>47)</sup>。

しかしそれと並んで候補生に対してミュンヘンの福音・ルター主義教区と広範囲のディアスポラの枠の中での牧師的活動というすでに言及された広い活動範囲が開かれていた。

《80年代から世紀末の期間が大都市の成長〔を意味し〕〔 〕は原著者）、この大都市は1900年に50万人に達した》<sup>48)</sup>のであるが、かかる都市におけるこの教区もいわばたえず成長しつつあった。1863年にはまだ会員が14000人であったが、トレルチの時代にはミュンヘンのプロテスタントの数はすでに3万人をはるかに越えていた<sup>49)</sup>。彼らの面倒をみるために4つの牧師職があてられていた——第5番目の牧師職は1872年になってようやく設置された。ここに特に適格の牧師を配置することは上級宗教局の仕事であった<sup>50)</sup>。そのために3人の都市担当の牧師補が着任し、また特にディアスポラの面倒をみるために3人の移動説教者が着任した<sup>51)</sup>。主教会としての聖マタイ教会と並んでミュンヘンの教区のために1877年によく建てられたマルコ教会が存在した。

これらの教会において説教者ゼミナールの候補生は、聖マルコ教会のゼミナールの礼拝と並んで、更に《朝の礼拝をも執り行わ》なければならないかった、また午後と平日の説教にたざざわることでもまれではなかった》<sup>52)</sup>。

更にミュンヘンの牧師並びに副牧師によってだけではもはや埋められえない宗教の授業が加わった；《ラテン語学校の3クラス……(並びに)実科ギムナジウム、幼年学校の生徒隊、実業中等学校、王室マックスヨーゼフ財団、女子師範学校、盲人協会と聾啞協会、身体障害者施設、すべての女学校、国民学校並びに青年学校においてすら宗教の授業は聖職者によってなされた。宗教の時間はこの様にして週113時間——受堅者のための授業を含まず——に達した。》<sup>53)</sup> かくて毎朝の宗教の授業を担当することがゼミナール生の仕事となった。

司牧の領域において専門の人たちにとって大いに仕事を軽減してくれたのはまず第一にゼミナール生によってひきつがれた宗教行事であった。ミュンヘンの福音的・ルター的全教区の受洗者、婚姻者並びに死亡者名簿から明らかなように、トレルチはミュンヘンの都市部の範囲だけで、即ちディアスポラの宗教行事を除いて、1888年12月7日(第1回目の葬式)と1889年9月18日(最後の洗礼)の間に合計53の宗教行事を執り行った。そのうち33回が洗礼(16回の受洗日に)、19回が葬式、そして1回が結婚式であった。トレルチによって執り行われた洗礼と葬式の数は彼のクラスの他の候補生の数とほぼ一致している。もちろん結婚式についても他の宗教行事に匹敵する数を執り行っている他の候補生に対して、彼は結婚式をたった1回しか執り行っていないというは目につく。

宗教行事の次にはもちろん本来の司牧活動があった。それは病気見舞から救貧事業の領域を経て死を迎えている人の心の準備にまで及ぶ。この死を迎えた人の心の準備に候補生は同じように深く関わったのであった。ブーフルッカー——彼は1884年になおミュンヘンの教区監督であった——の次の引用文がゼミナール生のミュンヘンの教区活動全体を把握している：《われわれの教区の維持のためにどういふ活動をするのか設立者は予見すらしなかったこの施設をもしわれわれが持っていなかったならば、われわれはどうするか？ゼミナールなくしては、ミュンヘンの牧師職と教区監督とは破産を宣告していたであろう。》<sup>55)</sup>

この枠を越えてディアスポラを対象に旅する候補生には——この場合にはすでに言及された教区的活動の一切が特に強く要求されたのであるが——教区の義務の独立的遂行という領域が開かれていた。この領域はミュンヘンのなかで強く監視された状況とは異って大いなる解放感があった。《非常に心配しながら説教壇への階段をのぼって行き、たいていは更におどおどしながら批判される場所へむかう畏縮した候補生が外では全く違った人間となる。つまり外では詩的世界にひたりきることが

でき、また感激の火の一つ一つが冷たい規則の強制によって抑圧されることがないからである。》<sup>56)</sup> この巡礼がゼミナール生の時間の大きいなる部分を要求したということは候補生が必要とされた地域の叙述においてのみみられる。ディアスポラは《ノイハウゼとシュパーピングの都市の門の前から始めて、ロイザッハ川とイザール川、マングファル川とイン川の谷で、またツークシュピッツェ、ヴァツマンとウンターベルクのふもとで終る》<sup>57)</sup> けれどもディアスポラ教区の感謝と受容によって、〔候補生の〕固有の展開の可能性と関連して、この仕事は、この仕事について報じているすべての人たちのところでは、ゼミナール活動の重要なかつ積極的な領域となった。<sup>58)</sup>

上述の仕事の遂行にのみ限られない本来のゼミナールの生活は神学的な立場の違いによって本質的な部分に対してその特性を持っていた。何となればこの説教者ゼミナールの枠の中で説教者ゼミナールの指導者並びに他の上級宗教局評定官によって代表される古い世代の人と《もともと近代神学を受けつける気のあった》<sup>59)</sup> より若い世代の人たちとの共同生活によって制約されている状況がはげしい論争にきっかけを与えたということは明白である。この時代の候補生の間で《熱烈な信奉者》を見出した社会主義への思想——これはナウマンによって仲介された——と並んで、とりわけそこには《所謂近代神学の信奉者たちが古ルター的書籍神学の信奉者に対立したところの》<sup>61)</sup> 違いが成長した。この時代の元ゼミナール生の報告には彼らの指導者たちが個人としてもしくは神学者として彼らに与えた印象の二面性が再三鳴り響いている。例えばカーゼルマンは当時の上級宗教局総裁シュテューリン<sup>62)</sup>について片や《個人的に愛すべき、まさしく子供のように気どらない男》と語りながら、《われわれゼミナール生が就任訪問したとき、「君たちはわれわれの宗派の信条書をことごとく例外なしに研究したかどうか」という問いだけをわれわれに向けている。〈近代神学〉に対する父親からのような警告を与えられて、われわれはおいとました》<sup>63)</sup>と続けている。

同じことがブーフルッカーに対しても主張されなければならぬであろう。つまり彼は《危険にさらされた数理問答》の著者であり<sup>64)</sup>、《新しい教会誌》<sup>65)</sup>の第2年度巻の最初の数ページに綱領的な論文《われわれのスローガン》において《キリスト教をより新しく解釈する》(1891)ことに対する彼の態度を明確にした：《そういう場合キリスト教のより新しい解釈とは〔現代という軽薄な〕時代精神と世界精神への不吉な譲歩として、教会の神的な基盤との——最も巧妙な理屈によっておおわれているが——断絶として、教会にとどめを刺す手段

をいとわない敵〔例：ニーチェ〕との熱い戦いの真只中で教会のモットーのにせものとして現れる。》<sup>66)</sup>

説教者ゼミナールの指導者たちは「性質や才能は異っているが、教会に対する愛の点では一つであり、父祖たち——教会の流儀を形成し、育て、そして守ることに協力したわれわれの領邦教会の父祖たち——の信仰に断固として忠実な人たち」<sup>67)</sup>であったとすれば、この形式意志は若い神学者をつめたく無視したかも知れない。<sup>68)</sup>

エルンスト・トレルチはこの様に条件づけられた論争の影響を受けざるをえなかったということを彼の牧師採用試験の際に提供され、そして起りうる衝突を堅果の形で含んでいる成績評価が示している：「〔彼の答案〕はあらゆる専門分野において一様にどれほど豊かな知識を獲得したかを示している。聖書の深みへいよいよはいて行き、そのことによって必要な簡素さを獲得するまで学ぶようにしてほしい。そうすれば、簡素さのなかに真理が含まれているということを体験することができるであろう。またそうすれば、彼〔トレルチ〕の職務に対して主の祝福を受けることができるであろう」<sup>69)</sup>

これに対して、ゼミナール生活の枠のなかで、つまりもはや大学ではないということと完全な牧師の重責をまだ負わなくてよいということとの間のこの生活の枠のなかで、再三共通のまた固有の発展に対する大いなる自由な空間が開かれていたということがもちろん心に留められなければならない。そして事実上、ゼミナール生一人一人に「彼の教育時代のこのオリジナルな部分」が「特別な喜びをもって」記憶のうちに留ったということはまさしくこのゼミナール生に帰属する自由に教えられなければならないであろう。<sup>70)</sup>

一面ではしばしば共通の集会有った。この集会是神学一哲学的議論から「最も適切には小春日和」と呼ばれうる行動に至るまでの巾を持っていた。とりわけ下の二つの階の明りが消されたとき、最上階のゼミナールハウスの中は「決して修道院的」ではなかった。<sup>72)</sup>他面、都市ミュンヘンは文化的並びに学問的なものをいろいろと提供することができたので、個人には、教会的な奉仕を越えて、個々の候補生によって強くいだかれた固有の関心の可能性が開かれていた。「この人は老リールのところで文化史の講義を聞き、あの人はホンメル教授と一緒に古代オリエントの秘密に没頭し、また幾多の副業のために時間と空間があった」。<sup>73)</sup>トレルチ自身は彼の履歴書において次の様にはっきりと述べている：「ついであるが近代的な教養についての私の知識もできるだけ完成させるために、文学史的並びに芸術史的研究にたずさわった」。<sup>74)</sup>

この引用の続きはバイエルン領邦教会へのトレルチの

その後の関係を決定的に規定するテーマを示している：「その際私は学問の一神学的問いに更に一層近づきたいという欲求をはげしく感じ、更に個人的素質によって神学的教職活動をめざしたいと思った」。<sup>75)</sup>

トレルチは彼の学問的関心を更におしすすめることを欲した。かくて上述の考え方は、バイエルン領邦教会に関しては、<sup>76)</sup>トレルチが1889年6月28日<sup>77)</sup>に王室プロテスタント上級宗教局に2年間の休暇の許可の願いを添えて提出した申請においてその具体化を獲得した。トレルチは——まず第一に——彼の履歴において学問的神学に優位を与えるために、説教者ゼミナールからの予定より早いめの退院を前提とするこの休暇を、神学得業士試験を受けるために使うつもりであった。

事実1年後、この試験を受けるためにゼミナールを退くというかかる申し出は、許可の展望なしになされたのではないということを示教者ゼミナールの歴史が示している。つまりこのゼミナールは「エアランゲンの受験指導の家庭教師の職の推薦に際して、その時代の〔候補生に〕召集されたもののうちで最も優秀な人たちのことを思いやる」可能性をすでに定款にうたっている。候補者フィリップ・バハマンの場合に典型的である。彼はトレルチの1年上級(1887年入学)で、1年後エアランゲンへ行くために休暇を与えられた。

トレルチの場合、彼がゲッティンゲン大学へ行くために休暇を願い出たかぎり、異例の申し出であった。彼はこのことを以下のことによって理由づけている。エアランゲンの受験指導の家庭教師の職への希望は諸事情によって打ち砕かれたこと、そしてゲッティンゲンへの彼自身の決断は、「まず第一に、懸賞論文によってゲッティンゲンではすでに知られていること。〔第二に〕ゲッティンゲンでは競争者が少ないこと、第三にエアランゲンでは牧師の任用試験を終えることが大学教授の資格取得試験を終えることよりも先行しなければならないが、ゲッティンゲンではそうではないこと、最後にゲッティンゲンでは論文や試験を彼が会話では得意としないラテン語で行うように義務づけられていないこと、以上の4つのことのうちに根拠を持っていた」。<sup>79)</sup>

彼の叙述によれば、「彼が目的を達成する力を持っているかどうか、同様に理論的活動が結局は実践的活動以上に彼にふさわしいのかどうか、非常に不安に」感じていた。「実践的活動の場合だったら、彼が専ら親しい関係にあり、そして彼が誠実と崇拜とあらゆる関係を通して密接に結びついている彼の故郷の領邦教会に貢献したいと思っている。それ故自分自身が領邦教会からしめだされるのを見ることは彼にとって非常に心苦しいことといえるであろう。同時にもし万一故郷の領邦教会の支え

が彼からとりのぞかれる場合には、アカデミックな活動への試みのような大胆な歩みを決心することは非常にむづかしいことであろう。<sup>80)</sup> 即ち、学問的活動へ突進していくに当って、トレルチの関心は、バイエルン領邦教会の枠のなかで現在存在する可能性を確保しておくことにとりわけむけられていた。

事務手続上のこの申請——フィケンシャー教区監督の推薦をつけて——の提出の後、1889年7月4日監督を通じての上級宗教局の布告によって、この年の10月2日から2年間の休暇が与えられ、そしてその結果説教者ゼミナールから解放されるということがトレルチに伝えられた。1889年10月1日でもってそれ故ミュンヘンにおけるトレルチのゼミナール時代は終わった。それとともに同時にバイエルン領邦教会内での直接的な奉仕も終わった。

許可された休暇は1891年10月2日までとなった。この休暇の許可を正当化し、そしてバイエルン領邦教会への関係をひきつづき保持するために、彼は1891年の春に牧師任用試験の申請をした。そして同時に上級宗教局に(アウグスブルクからの)4月2日付の通知において、得業士の学位を得るためにこれまで受けた試験、並びに教会史と教義史の専門分野で教授資格取得の意向について報告し、更に「許可された休暇の勤勉な利用の証明」として「当然のお礼のしるしに」上級宗教局に、ヨハン・ゲルハルトとメランヒトンにおける理性と啓示についての彼の書物の謹呈を予告した。<sup>81)</sup>

1891年6月14日に彼はアンスバッハでの第2次神学試験〔牧師任用試験〕に出頭しなけりなかつた。任用試験に出頭の日時は可変であった(42人の通知を受けた候補生のうち3人は1886年に、13人は1887年に、25人は1888年に、そして1人は1889年に第1次試験〔牧師採用試験〕に合格していた)ので、1891年に出頭するというトレルチの決心は彼の未来の学問的関心との関連においておそくみられようであろう。つまり学問的関心がバイエルン領邦教会からの更なる休暇を必要としていたのであり、そしてこの更なる休暇の許可を得るために、2次試験を受けることがそれなりに役に立ちうるのであった。

この試験の主事は上級宗教局評定官プレーガーの仕事であった。彼に協力したのが宗教局評定官ルツ、ブルガー、フォン・リーデルスクローン並びに聖ヨハネ教会の第2席牧師アウエロックスであった。<sup>82)</sup> 第1次試験と同様任用試験は三つの時期に行なわれた。その際トレルチには13人の候補生と共に6月14日(日)から6月20日(土)までの第一期が割り当てられた。日曜日に「(試験委員会の前に)出頭すると、牧師アウエロックスは一人一人の受験生に第4戒或いは第5戒に属する教義問答の文句

を教義問答の草案の課題として示した」<sup>83)</sup> 次の3日間は一ペーパーテストであった。月曜日、教義学——プロテスタント的観点とカトリック的観点における信仰、義認及び救済といった教義学的諸概念。新約学——使徒行伝24、10-21の釈義。火曜日、教会史——カール大王の時代の教皇制、並びに旧約学——詩編137の釈義。水曜日、教会法——洗礼の挽回の規定、教育制度、教会のための寄進の利子。倫理学——マタイ16、24fによるキリストの自己否定。説教学の即席課題——「マルコ10、42-45について詳細な説教の組立てが企画され、説教の導入部の原稿が書き上げられなければならない」。教育学と教授法——「従順への教育について、並びに「授業が退屈にならないためには、授業はどのように行われなければならないか」。

木曜日にはアンスバッハのグムベルトウス教会において試験の一週間前に提出された説教(トレルチはEph. 2、4-8について)の一部の挙行並びに日曜日に行なわれる教理問答の一部について「召集された一定数の女子学生との」教理問答。

金曜日と土曜日は口頭試験。教義学では教理史と信条学——教会についての論文。新約学——2.Kor. 4、1-16。旧約学——Ex. 3、1-18。倫理学——宣誓と誓願。教会法——洗礼と信仰の変化。説教学——抜打ちの作文による説教の導入部についての問い。教育学と教授法——都市や田舎の学校における困難性。そのあと成績の報告。トレルチは牧師任用試験に1番(優秀)で合格した。

それ故彼は少し前に得業士試験に最高優等 Summa cum laude〔優等の順。最高優等、第2位優等 magna cum laude, 優等 cum laude〕で合格し、そして教授資格を獲得したその年に、〔牧師任用試験で〕年間通しての最高の成績をとることに成功した。

試験のすぐあとで(7月3日)彼は——ゲッティンゲンへ帰ってから——上級宗教局にバイエルン領邦教会への雇用関係を保持しながら許可された休暇の延長の申請をした。「実践的な仕事へ帰っていく可能性を持たないと——この種の仕事は結局は彼を満足させないとしても——彼の心にかかっている学問的研究を続けることはできない。」<sup>85)</sup> それに対して彼に7月8日に、1892年10月1日までの1年間の更なる休暇が許可された。

この休暇中にプロイセンの国務に就任した(1892年4月1日)というボンから差出された1892年6月24日の報告並びに同時に提出された引き続いての休暇延長の願いに対して、王室プロテスタント上級宗教局は1892年7月28日に彼に対して次のことしか報告できなかった。「あなたの報告に対して……われわれは次のように回答す



る。プロイセンの国務への就任でもって、あなたはわれわれとの雇用関係から自から離れていったのであり、それ故に休暇を願い出たり或いは休暇をとり続けることはできない。しかしながらいつかわれわれの領邦教会の実践的職務に就任するために以前の関係をひきあいに出して、われわれを頼って来ることは許されている。》<sup>86)</sup>

しかしこのことでもってエルンスト・トレルチのバイエルン領邦教会への関係が終わったのではない。彼自身の願いに従って、彼は《聖職身分の教員》という部門の下で領邦教会の個人的身分に登録された。ベルリンへ移ってから《願いによって、ひき続き登録される》というカテゴリーではっきり呼ばれ、そしてこのようにして故郷の教会への結びつきを表明することに価値を置いた。それを越えて、エルンスト・トレルチにはバイエルン領邦教会によって与えられた按手が生涯にわたって有効であり続けた。

#### 原 注

- Johann Andreas Rutz, 1821-1904. 聖職按手式 1845 ミュンヘン(説教者ゼミナール), 次にミュンヘンで代理牧師, パッサウで副牧師. 1853年ケンプテンで牧師. 1867年ネルドリンゲンで監督, 1879年アンズバッハの宗教局第Ⅱ評定官. 1883年アンズバッハの宗教局第Ⅰ評定官. 1891年王室上級宗教局評定官. 1892年退職. — Karl Christian Burger, 1834-1905. 聖職按手式 1856 ミュンヘン(説教者ゼミナール), 次にアウグスブルクで副牧師. ブルテンバッハ, ケムプテンで牧師. 1883年アンズバッハの宗教局第Ⅱ評定官. 1891年ミュンヘン上級宗教局第Ⅳ評定官(同時に説教者ゼミナールの所長), 1896年からミュンヘン上級宗教局第Ⅲ/Ⅱ/Ⅰ評定官. 1893年神学博士. 1900年 Karl Christian » Von Burger «〔vonは貴族に付く〕となる. — 彼は《アンズバッハの宗教局出身で、厳格な人で、きびしい批評家という名声が先行した》人として記されている(Veit, S. 16).
- Adolf Liederer von Liederskron, 1847-1910. 1876年帝国検察官代理, 次に領邦裁判官補, 帝国第Ⅱ検察官, 1887年ミュンヘン領邦裁判所第Ⅰ参与. 1888年アンズバッハ宗教局評定官. 1900年上級宗教局評定官—試験内容: 教会法 Johann Leonhard Sommer. 1833-1902. 聖職按手式 1857年ミュンヘン(説教者ゼミナール), 次にクロナッハで牧師補. オーバライムバッハで牧師. 1875年エアランゲンの新市街地区で第Ⅱ牧師. 1875年神学得業士—試験内容: 教義史, 新約, 説教. — Joseph Carl Felsmann Gustav Schlier, 1827-1908, 1850年からフランケンホーフェンで定員外牧師補, 1871年からヴィンズバッハで第Ⅰ牧師と教区監督. 1887年宗教局評定官, 1896年管区視学官—試験内容: 教義学, 倫理学, 信条学. — Karl Wilhelm Nägelsbach, 1837-1909. 1859年アンズバッハで聖職按手式, 次にハップルグで定員外牧師補, フェルトで代理牧師, 1860年ヴェルツブルクの都市牧師補, 1861年ギムナジウムの教員, 1874年パイロイトのギムナジウムの教授, 1900年宗教局評定官. 1905年引退—試験内容: 旧約, 教会史, 教理問答, — 以下の記述は試験記録 27. 8. ff. による.
- AHB S. 238/240. — 毎日の2題の試験は〔特定の部屋に一定時間拘束して監督つきで書かせる〕筆記試験の形で行なわれたが, この試験のテーマがここで簡単に再現される.
- AHB S. 238.
- AHB S. 248.
- AHB S. 294.
- 1833年5月30日付の設立定款(序文); AHB S. 280を比較参照.
- AHB S. 280 f.
- Vgl. Geyer, S. 85.
- Vgl. AHB NA S. 123.
- Dr. Wilhelm Immanuel von Biarowsky, 1814-1882, 1860年からエアランゲンの教区監督.
- 1870年1月10日の Biarowsky 旅行奨学金の設立についての文書の § 1 と § 2.
- A. a. O., § 7.
- Troeltsch, Brief vom 16. 10. 1888.
- Troeltsch, Brief vom 16. 7. 1888.
- Julius Knoell, 1865-1921, 聖職按手式 1888, 後にツァイリツハイム, ロイティンで牧師. 新ウルムで教区監督. — Ernst Lauerbach, 1866-1941. 聖職按手式 1888, 後にズルツビュルク, ニルンベルク, エルベンドルフ, シャルクハウゼンで牧師. — Andreas Schwindel, 1864-1953. 聖職按手式 1888, 後にオルテンブルク, ドナウ河畔のノイブルクで牧師. — Gottfried Seiler, 1866-1940. 聖職按手式 1888, 後にエアランゲンで受験指導家庭教師, フォイヒトで牧師. ルンメルスベルクで視学, カッテンホーホシュタットで牧師.
- Konrad Fikenschner, 1833-1901. 聖職按手式 1860, 1857年からフェルト, ヴェルツブルク, キッペンゲンで牧師補, 1864年アイヒシュテットで牧師, 1885年ミュンヘンの教区監督並びに第Ⅰ牧師, 教区学校視学, 1892年アンズバッハの宗教局評定官, 彼の人間性

- の故にミュンヘンの候補生によって非常に尊敬された。Caselmann (S. 56) は彼に関して《われわれにとって彼をして価値あらしめた諸特質が彼の出世のさまたげとなったとわれわれは思った》と述べている。
18. 1888年10月1日の教区監督 Fikenscher のところでの面接の記録。AHB S. 295 も参照せよ。
19. この教育が局外の牧師によってどのようにみられていたかという印象とどういう期待がこの教育と結びつけられていたかを, Schick はくっきりと照らし出している。S. 36 f.:《ゼミナール生の場合, ゼミナール時代は神学的理論化の繭から出る時期である。そのときに彼は教義学の鎧, 有名な釈義の技術の装甲, 教会史の確かさと正確さの剣を捨て, 彼の心の, 彼自身の暖いそして信仰深い心の投石器の石〔サムエル上17, 40, 49〕をとって来て, その石を心の貧しい人のために使い, そしてそのことによって神から離れるゴリアテとキリストや教会から離れるゴリアテ的な人をつけるのに役立つ。》
20. Veit, R. D. S. 16.
21. Karl Christoph Wilhelm Buchrucker, 1827-1899. 聖職按手式1854アンスバッハ, 1850年から家庭教師, 次にゲルスフェルトで副牧師, 1854年ネルトリンゲンのオーバーライムバッハの牧師, 1873年ミュンヘンの教区監督と第I牧師, 教区視学官, 1885年からミュンヘンの上級宗教局第IV評定官(そして同時に説教者ゼミナール所長), 1891年上級宗教局第I評定官。
22. Sigmund Christoph Wilhelm Bäumlér, 1807-1893. 1829年フェアヴェーザーで教師, 1835年からブーハウ, ベルンドルフ, トゥルナウ, レーゲンスブルクの牧師, 1859年アンスバッハ宗教局第III評定官。次に宗教局第II評定官, 1873年からミュンヘンの第IV/III/II/I上級宗教局評定官, 1885年退職。神学博士 — Bäumlér も説教者ゼミナールの所長として非常に人気があった:《彼の存在全体がすてきで, そして愛嬌があった》(Veit, S. 16)。
23. Veit, S. 16.
24. Maximilian von Ammon, 1866-1933. 聖職按手式1887, 後にメミンゲン, ミュンヘンで牧師, アンスバッハで宗教局評定官, ミュンヘンの上級宗教局評定官。神学博士 — Philip Bachmann, 1864-1931. 1887年以後エアランゲンで受験指導の家庭教師, ヴァフェルスハイムで牧師, ニルンベルクでギムナジウム教授, エアランゲンで大学教授。神学博士。 — Hermann Köberle, 1864-1916. 聖職按手式1887, 以後ミュンヘンで移動説教者, ベルネック, ゼルプ, ミュンヘンで牧師。メミンゲンで教区監督。
25. Caselmann, S. 55; Veit, S. 15をも比較参照。
26. Veit, S. 15; Geyer, S. 94f.
27. 1889年2月2日上級宗教局によって拒否される。Veit, S. 14も比較参照。
28. Seeberger, S. 171.
29. ゼミナール生のための指令1837, §2; AHB S. 281 (Anm.)を比較参照。
30. Veit, S. 15.
31. 1889年8月22日の手紙; 1889年9月25日の上級宗教局からの答え。
32. Veit, S. 15.
33. 1833年以来妥当した (AHB S. 285 ff.), 一般的なバイエルンの按手式の秩序は1899年ですら妥当した。Seeberger, S. 156 ff. 参照。
34. 1837年のゼミナール生に対する指令 §14; AHB S. 283 (Anm.) 比較参照。
35. Troeltsch, Lebenslauf.
36. Julius Karl Kelber 1839-1912. 聖職按手式1861ミュンヘン(説教者ゼミナール), フライズィング, ミュンヘンで牧師補, クルムバッハ, ペグニッツ, インゴルシュタットで牧師, 1878年ミュンヘン第III牧師, 1892年ミュンヘン第I牧師並びに教区監督, 教区視学官, 1896年からミュンヘンの上級宗教局第IV/III/II/I評定官, 1899年神学博士。 — Adolf Hermann Friedlich Kahl, 1846-1914. 聖職按手式1870ミュンヘン, ミュンヘンの移動説教者, 都市付牧師補, ケンプテン, ヘンゲンフェルト, シュヴァインフルトの牧師, 1886年ミュンヘン第IV牧師, 1896年ミュンヘン第I牧師と教区監督, 1905年ミュンヘン上級宗教局評定官, 1912年神学博士。
37. AHB S. 291 (Anm.)。
38. AHB S. 232 (Anm.); S. 231 (Anm.)をも比較参照。
39. Troeltsch, Lebenslauf.
40. かかる発展が外からの批判によってもどの程度規定されたかが問われなければならない。説教者ゼミナールは強い抵抗(《候補生の不足, 牧師補の欠如, 空いた牧師席を埋めることの不可能な状況》)に直面しての憤激の叫び:即ち《ゼミナールは公的なパレードに際して聖職者の列を増やすためだけ存在するという噂》 — Buchrucker, Vortrag, S. 20)と戦わなければならないということ説教者ゼミナールの50年祭のための個々の講演が示している。そしてこれらの講演はまさにこの点で強い弁証的な傾向を見せている。
41. 礼拝への出席義務については Instruction, §4 — AHB S. 281 (Anm.)を比較参照; 説教の批評に

- ついては；このような機会に〔思想の〕違いが判明したということ Veit の引用 (S. 21) が示している。この引用はなるほど Buchrucker の後継者 Burger に関係させられているが、二人の神学的立場の共通性の故に確かに Buchrucker にも適用されうる：《とくに説教の領域で起った変化は幾多の論議をするきっかけを与える。テキストから出発し、そしてテキストを論じつくす言葉の宣教の立場の人たちは、聖書の言葉に則りはするが、その時に応じての、しばしばモットー的な利用に重点を置く人たちが抬頭するのをいくらか不快な気持で見ていた。講演の形式にならって、あらかじめテーマを告知するという時代がやって来た。こういう方法を Burger が要求するテキストの扱いとは容易におりあわない。つまり Burger はテキストを読んだあと、テキストの解釈と応用の代償として神の祝福を懇願している。》
42. リストには日付がない。多分1889年11月のものと思われる。—— Christian Geyer の諸説教の彼自身の番号付に帰っていく目録 —— Christian Geyer は説教者ゼミナールの比べられる期間（それは1885年12月25日から1886年7月25日に及ぶ）Riessbeck (II, S. 133) のところに居た —— は15回の説教を申告している。そのうちもちろん2回だけがゼミナールの礼拝である（それと並んで5回は朝の礼拝で、他の説教はよそで）。
43. Troeltsch, Brief vom 11. 9. 1889 ; E. Dinkler-von Schubert, S. 23 (Anm.) を比較参照。
44. 1889年末の Buchrucker の上述のリスト。Veit, S. 20をも比較参照。
45. Caselmann, S. 57.
46. Buchrucker の上述のリスト。—— 取り扱われたテキストの数がきわめて少いということからゼミナール生の各々はこのテーマを取扱わなければならなかったということが予期されなければならない。
47. Bäumler, S. 18 —— この規則はトレルチの時代を越えても維持された。
48. Veit, S. 7. —— この時代のミュンヘンが観察者に与えた感情を Veit, S. 8 が伝えている：《人々は教会的な威厳、宮廷風の華美さ、田舎風の色あいを帯びた市民的気楽さ、これらが予期されざるかっこうで並存しているという印象からのがれられない。》
49. 1884 30000 ; Buchrucker, Vortrag, S. 21を比較参照。
50. Veit, S. 9f. 比較参照 —— 個々の牧師職は仕事の領域から教団全体の需要に合わされた。教区への分割は1900年頃になってはじめて導入された。

51. イーザル川の左岸と右岸で一人ずつ、実に1885年以來 Weillhelm 地区に1つのポストが加わった。
52. Veit, S. 21.
53. Buchrucker, Vortrag, S. 21 —— 1884年から；1888年までにこの数は更にふえたであろう。
54. Caselmann, S. 58を比較参照。
55. Buchrucker, Vortrag, S. 22.
56. Caselmann, S. 58.
57. Veit, S. 23.
58. Caselmann, S. 58 ff. ; Veit, S. 23 f. ; Geyer, S. 94を比較参照。
59. Caselmann, S. 56.  
〔紙面の都合で原注60~86は省略〕

## Literatur

- AHB = Neues Amtshandbuch für die protestantischen Geistlichen des Königreichs Bayern diesseits des Rheins, Bd. I, München 1862.
- AHB NA = Neues Amtshandbuch für die protestantischen Geistlichen des Königreichs Bayern diesseits des Rheins, Neue Auflage, Bd. III, München 1883.
- Georg Seeberger: Handbuch der Amtsführung für den protestantischen Geistlichen, München 1899.
- Sigmund Bäumler: Eröffnungsrede (anlässlich den 50-Jahr-Feier des PS München), in: FS zum Andenken an die 50 jährige Jubelfeier des evangelischen Predigerseminars zu München, München 1884, S. 14-19.
- Karl Buchrucker: Die kirchliche Bedeutung der Katechese, in: Neue Kirchliche Zeitschrift I (1890), S. 219-233.
- Unsere Losung, in: Neue Kirchliche Zeitschrift 2 (1891), S. 1-12.
- Vortrag (anlässlich der 50-Jahr-Feier des PS München), in: FS. a. a. O. S. 20-25.
- August Caselmann: Erinnerungen an das Münchner Predigerseminar, in: Noris-Bayrisches Jahrbuch für protestantische Kultur 2. Jg. (1909), S. 54-63.